

# らいぶ LIVE 創 REATOR つくりえいたー

NO.71  
2014年6月  
研究広報誌

## CONTENTS

学びをデザインする子どもたち

～課題意識の深化を通して～

- 2014夏季教科領域別研修会のご案内……………1
- 複式研を終えて：「第14回複式授業研究会を終えて」……………2
- 学習紹介（算数科）：主体的に学び合う複式教育……………3
- 学習紹介（理科）：子どもたちが主体的に学び合う複式教育……………4
- 学習紹介（社会）：水産業のさかんな地域・勝浦……………5
- 学習紹介（体育科）：「体づくり運動多様な動きをつくる運動遊び」……………6
- 学習紹介（国語科）：1年生教室にも新聞作りを！……………7
- 学習紹介（生活科）：きゅうしょくのひみつ……………8

## 2014夏季教科領域別研修会 ～ご案内～

24日(木)	午前の部9:30～12:00	午後の部13:30～16:00
<b>社会：</b> 午前中は、実践発表を2つ行います。昨年度大好評だったワークショップ形式で授業記録をもとに社会科のおもしろさについて話し合います。午後からは大阪教育大学の馬野範雄先生（大阪教育大学）をお招きして、講演していただきます。午前、午後ともに2学期から社会科の授業が楽しみになる実践的な内容を予定しています。	<b>生活：</b> 和歌山市生活科・総合教育研究会と共催して行います。前半は実践発表をもとに参会者の方々の意見交流を、後半は山中昭岳先生（関西大学初等部教諭）に講演していただきます。	<b>理科：</b> 前半は本校理科部と和歌山市理科研究会からの実践報告をもとに、参加者と意見交流しながら進める予定です。後半は理科の授業経験豊富な先生方をお招きしてシンポジウムを開き、楽しい理科の授業の創造につながる会にしたいと考えています。
<b>複式：</b> 3・4年生国語科の授業を公開し、協議会を行います。後半は、西村充司先生（大野小学校教頭）、浦貴子先生（毛原小学校教頭）、本校複式担任によるパネルディスカッションを計画しています。	<b>体育：</b> 6年生「マット運動」と2年生「体づくり運動」の実践発表と実技を行います。運動のできる服装と、体育館シューズをご用意ください。また林修先生（和歌山大学）をお招きし、「子どもを観る視点」について講演していただきます。	

- 参加申し込みは、FAXまたは本校HP（→本誌8ページに掲載）をお願いいたします。
- 当日は本校運動場が駐車場となります。（→正門左の通用門よりお入りください。）
- 参加費は1,000円となります。（資料代を含む）○再入場の際は、領収書をご提示ください。

25日(金)	午前の部9:30～12:00	午後の部13:30～16:00
<b>国語：</b> 午前本校国語部と和歌山市国語教育研究会からの授業実践の報告会、午後は、「学び合いを支える言語活動」をテーマに、本校1年生と4年生の授業を公開し、研究協議会を行います。	<b>算数：</b> 2年生と6年生の授業を公開します。また、指導助言として片山啓先生（和歌山大学）をお招きして、協議会を行う予定です。	<b>食育：</b> 前半は、食育指導の実践報告と食物アレルギー対応について研修を行う予定にしています。後半は、大きなドラム缶を利用しておいしい“手作りピザ”を楽しみます。
<b>図工：</b> 鑑賞の授業について語り合しましょう。近代美術館の学芸員の方に、学校との連携実践について、語っていただきます。近代美術館の鑑賞（有料）もしましょう。	<b>音楽：</b> 本年度も佐野靖先生（東京藝術大学）をお招きします。『「比べる」ことでせまる音楽の魅力』の実践報告をもとに、「音楽科教育における現状と課題」（仮題）について講演していただきます。また本年度は和歌山県音楽教育連盟と共催しています。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 80%;"> <p>※当日受付も行いますが、準備の都合上、事前の申し込みにご協力くださいますよう、どうかよろしくお願いたします。</p> </div>

## 第14回複式授業研究会を終えて

6月14日(土)本校複式学級におきまして、第14回複式授業研究会を行いました。近畿各府県を中心に、遠くは山形県や長崎県など、100名近くの方がお越しくださいました。

1年生では、足りないたしざんカードはないかを調べる活動を通して、被加数、加数、答えの関係について多様な見方ができるようになることをねらいとしました。2年生では、 $a - \square = b$ の口を、図を使って求め、図を用いて説明し合えることをねらいとしました。

子どもたちは、互いの考えを図やカードをもとに説明し合い、学び合いの場を生み出すことができていました。しかし、個々の考えが全体のものとして定着させられなかったと感じています。問題文に戻ったり、気付きを文字として残したりすることが今後の課題となりました。



3年

3・4年生は、ふたつの説明文を比べ、筆者の書き方の工夫について学習しました。

3年生は「イルカのねむり方」と「ありの行列」を比べることを通し、説明文の文章構成を考えました。「はじめ・中・おわり」の形を知り、「問い・答え」というふたつの説明文の特徴を学習できました。

4年生は「動いて、考えて、また動く」と、昨年度学習した「ありの行列」を比べました。双括型、尾括型というふたつの説明文を比べることで、「書きたい説明文の内容によって使い分けたほうがいい」という意見が出されました。この意見を深めることで、子どもたち自身が目的に合った説明文作りができるようになって考えています。

今後、両学年ともに自分たちで考えた説明文を書きます。ふたつの説明文を比べることで説明文を知る大切な時間になったと思います。



4年

5年生は、メダカの食べ物水中にあると考え、採集に出かけた時の川の様子を発表し合うなどして、予想を立てました。メダカがいた川の水を観察することになりますが、ここで顕微鏡が必要となります。そこで、6年生に顕微鏡の使い方を教えてもらうことにしました。

6年生は、食物連鎖について、調べてきたことを中心に発表し合いました。「食物連鎖の始まりは植物」という発表を取り上げ、昨年観察したミジンコは、植物を食べていたのか尋ね、実際に見てみようと思ひかけました。

ここで両学年が合流して顕微鏡を用いて観察しました。6年生が、自分たちの学習活動を中断してまでも、丁寧に5年生に教えている姿が見られ、異学年が学び合う複式学級の良さを改めて実感しました。

午後からの全体会では、複式学級における長所と短所について、各学校での取り組みや悩みなどを挙げながら交流できました。短所を長所に変えるべく、日々の支援・指導を工夫する必要があると考えさせられました。分科会では、教科を中心とした取り組みについて、さらに協議を深められました。

最後に、岐阜大学教職大学院教授の石川英志先生に「学びをデザインする子どもたちに学ぶ～子どもをとらえなおす教師の眼をみがく～」と題してご講演いただきました。

皆様からいただいたご意見をもとに、子どもたちが主体的に学び合う複式教育の充実を心がけたいと思います。また、さらに成長した子どもたちの様子を、11月2日(日)の教育研究発表会2014においてご覧いただこうと思います。ぜひご参加くださいますよう、よろしくお願いいたします。



1年



2年



5年



6年

主体的に学び合う複式教育～学び合いの場を生み出すみとりと支援～

## 学び合いの場をつくるために

算数科

1・2年F組担任  
土岐 哲也



今年度の複式教育の研究テーマは「主体的に学び合う複式教育～学び合いの場を生み出すみとりと支援～」です。学び合いの場を生み出すことは、複式学級だけにかかわらず、単式学級においても大切なことではないでしょうか。

私は、学び合いの場を生み出すためには次の3点を大切にしたいと考えています。

- ①活動の中で発見・疑問・驚きがあること ②多様な考えが期待できること ③図や表を使って説明すること

授業の始めに必ず課題提示をします。そして、子どもたちはこの課題を解いていきます。しかし、課題解決の後、答え合わせをして終わりでは学び合いの場は生まれません。課題解決したときやその過程で、発見や疑問、驚きが必要です。1年生の「たしざん(1)」で、たしざんカードを使った授業の実践例を挙げてみたいと思います。

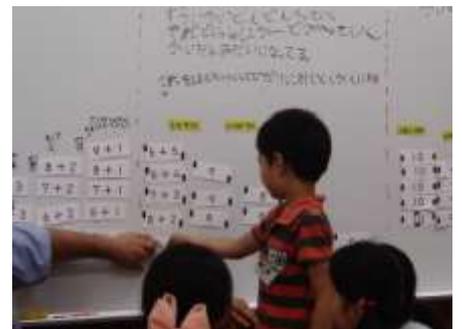
### 1年生の「たしざんカード」を使った授業

たしざんカードは、暗算力を養うのに使われます。今回、たしざんカードを使って数を多様に見る力を養おうと考えました。例えば、被加数は同じだけど、加数が1ずつふえていっている、被加数、加数のどちらかが1増えていけば、答えも1増えていくといった見方です。話し合わせたいので、ペアでの活動を取り入れることにしました。そこで問題になるのが何枚並べさせるかです。「たしざん(1)」では答えが10までのたしざんを扱います。したがって、カードの数は45枚あります。全て並べさせると、時間がかかってしまいます。そこで、被加数が5～9までの15枚のたしざんカードを使うことにしました。

15枚のカードを各ペアに配布し、「たしざんカードを途中まで作ったんだけど、カードはちゃんとそろっているか調べてくれないかなあ。」と、子どもたちに投げ掛けました。さらに、「どんなに調べていけばいいんだろう。」と言うと、子どもたちは思い思いに動き始めました。子どもたちの様子を見てみると、どこから手をつけていいかわからない子もいます。そこで、教師の登場です。「同じ数字のところのカードを集めて並べてみたらどうか。」と支援しました。すると、答えに目をつけて同じ数字を集め並べ始めました。しばらくすると、「わかった、わかった。」とうれしそうな声が聞こえてきました。加数に目をつけたペアが、被加数が順番になっていることに気づいたのでした。その後、カードを順序よく並べていました。ここに、子どもたちの発見と驚きがあるわけです。最終的に、答えに着目して並べたペアと加数に着目して並べたペアの2通り出てきました。(被加数に着目して並べるペアはいませんでした。)

自分たちが考えた方法を黒板に並べてもらいました。すると「カードがへっていき。」「階段みたいになっている。」「この数字(被加数)が減っていく。」「本当だ。」「ここ(階段の始まり)の数が5, 6, ...と増えていく。」等の意見が出ました。さらに、「答えのカードの裏側はどうなっているのだろう。」ということで、カードをめくってみました。「ぐちゃぐちゃや。」カードがきれいに並んでいないといっているのです。「じゃあ、並び替えてみようか。」「きれいに並び。」この後、加数に目をつけて並べたカードと、答えに目をつけたカードを比較させる予定でしたが、時間切れとなってしまいました。

この実践では、カードがあることで、説明しやすくなるし、聞いていてもよくわかります。そのため、子どもたちは自分の考えとちがった考えが理解しやすくなり、新しい視点を獲得できたと考えています。初めの課題を解決する中で、発見・疑問・驚きがある。それを発表し合い、新しい視点や知識を得る。これが、低学年での学びの場であると考えています。



## 子どもたちが主体的に学び合う複式学級 ～複式・理科を学年別学習指導で行う～

複式・理科  
5・6年F組担任  
中西 大



複式授業研究会では、複式・理科の課題として「学年別学習指導の難しさ」や「極少人数のため話し合いが深まらない」ことについて挙げられました。そこで、年間指導計画や単元構成を工夫することや、少人数でも話し合いを活発にして課題解決させるための支援について考え、実践しています。

### ●年間指導計画を工夫する

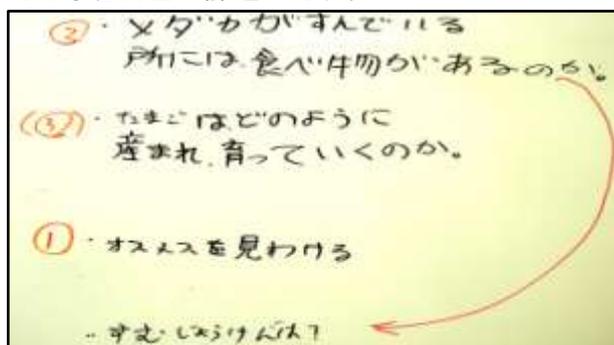
関連のある単元を異学年で同時進行させることで、異学年が共同して学ぶことができます。下図は、5・6年生の単元に関連をもたせた例です。

5年生	6年生
○植物の発芽と成長	○植物のつくりとはたらき
○メダカたんじょう	○ものが燃えるとき
○花から実へ	○生物どうしのつながり
○ものとのけ方	○自然とともに生きる
○流れる水のはたらき	○水よう液の性質
○雲と天気の変化	○大地のつくりと変化
○ヒトたんじょう	○月と太陽
○電磁石のはたらき	○ヒトや動物の体のつくりとはたらき
○ふりこのきまり	○発電と電気の利用
	○てこの規則性

単に分野で分けてしまうのではなく、異学年の子どもたちが交流しながら学べるような題材を設定するなど計画しています。

### ●単元構成を工夫する

単元の導入では、子どもたちが対象に多く触れることで、自分たちの課題意識をもつことが大切です。例えば、教材を早めに与えてじっくりと触れさせることで見えてくる課題をみとります。また、教科書に目を通してやってみたいことに取り組みすることも、子どもたちの関心に沿った課題設定につながると考えています。そして、単元の学習計画を立てさせることで、子どもたちの課題意識に沿った単元構成ができると考えています。下図は、5年生が「メダカたんじょう」の単元で立てた学習計画（課題）です。



課題を設定した当初、オスとメスを見分けるといって課題がありませんでした。そこで「たまごを産む様子を観察したいのなら、メスを観察したほうがいいよね？」と問い、新たな課題への必然性をもたせました。すると、子どもたちは「オスと

メスを見分ける」という課題を設定しました。

子どもたちが主体的な学習活動を展開するには、どのような対象や活動を単元に組み込む必要があるのか、以下のように考えて実践しています。

- ・楽しそう、やってみたい、不思議だ…など、興味関心を向けられる内容がある。
- ・本物を見たことがない、触れたことがないなど、日常生活にない**未経験**のものがある。
- ・模型の製作や観察記録の作成など、**目的意識**をもって取り組む。
- ・触れる、動かす、実験する、観察するなど、**具体的な対象**を用いることができる。
- ・自分だけの具体物や教材を持っていたり、自分オリジナルの○○を生み出したりする。

### ●学習の流れ

理科には「予想→実験・観察→結果→考察」という基本的な流れがあります。本校の複式学級では、次の流れを基本として身に付けさせ、どの教科でも活かせるように取り組んでいます。

- ①課題を確かめる
  - ・疑問を明確にして課題とする、学習目標を設定する。
- ②見通す
  - ・どのような学習活動が適切か、授業後はどうなっていたいか。
- ③調べる、考える（ひとり学習）
  - ・自分の考えをまとめ、考えを伝え合うための準備をする。
- ④深める（ペア学習やグループ学習）
  - ・考えを表出して伝え、全体で吟味してより良い考えに高める。
- ⑤まとめる
  - ・学習目標を達成できたか、どんなことがわかったか。

### ●話し合いを深められる課題を与える

少人数では、多様な意見が出ずに話し合いが深まらないことがあります。そのため、○か×ではなく、様々な違いが出やすいもの、条件や視点によって捉え方が違ってくる対象や課題を示すようにしています。また、身近であり、子どもたちが話し合う価値を実感し、相手の考えを楽しみながら聞ける題材に作り変える必要もあります。

5年生の国語科では、「枕草子」を扱う単元があります。「をかし」という言葉を取り上げ、その意味を考えさせます。子どもたちは、「お菓子・おかしい・～を貸しなさい」など自由に考えますが、本当の意味を知って驚き、興味をもち始めます。そこで、2人ペアでオリジナル現代語訳を作らせました。自由に情景を想像しながら、似た言葉を探して当てはめたり、文脈を読み取ったりしながら自分の考えをどんどん話しました。このように、自由度のある課題で考えを引き出し、話し合いを深めることが可能だと考えています。

## 水産業のさかんな地域 勝浦・串本

～世界がそうくるなら5Cにも考えがある～

社会科  
5年C組  
梶本 久子

これからの社会は市民がこれまで以上に主体的に参画することが求められています。そのためには、地域との主体的なかかわりをもととする子どもを育てることが必要です。本単元では、地域教材との出会いを大切に、子どもたちが抱いた疑問や発見から生まれた問題を取り上げました。今話題になっている近大マグロのキャッチコピー「世界がそうくるなら、近大は完全養殖でいく」を紹介した子どもがいました。それまでも4月から朝の会等で話題になっていたマグロただけに、子どもたちが「世界がそうくるなら5Cにも考えがある」というテーマを考え、それぞれの考えや思いを強くもって水産業を学んでいこうという決意のもと学習が始まりました。本単元は、水産物の生産に従事している人々の工夫や努力を那智勝浦町・串本町のマグロ漁や養殖業を中心に学習しました。長年養殖に携わっている漁協のY組合長に何度も交流することにより、より身近に感じることができました。また、水産業にかかわる人々の工夫や努力だけでなく、問題点にも気づき、今後の和歌山や日本の水産資源確保について考えることは大変意義があったと考えています。その取り組みの様子やそこで見えてきた子どもの変容を紹介します。

## ■水産業のさかんな地域 勝浦・串本

## ◎5年生社会科における課題意識の深化

今年度は研究主題のサブテーマとして「課題意識の深化」という新たな視点が加わりました。社会科の単元における課題意識の深化とは、子どもが資料の観察を通して把握した事実、体験的な活動を通して生まれた気づきから学習問題をつくり、見通しをもって社会的事象を調べてく中で、課題意識が高まっていくことだと考えます。その課題意識の深化は切実な問いやこだわりとなって表れます。そして社会的なものの方の見方・考え方の広がりや深まりは、自分なりの考えの根拠を述べる子どもの姿にも表れます。さらに5年生としては、地図・各種資料を効果的に組み入れた学習過程をつくり、社会的なものの方の見方・考え方の広がりや深まりをみとることで、子どもたちにもその事象の社会に対する機能や影響が見え、より課題意識が深化していくのではないかと考えました。



## ◎ふるさと和歌山（地域）に学び、和歌山を愛する個に

地域に学ぶとは、教材との出会いを地域にかかわることから見つけ出し、地域の「ひと・もの・こと」とのふれあいの中で社会的事象を考えるきっかけをもたせることだと考えます。そして、今年度も1年を通して「和歌山」にこだわった学習をするために「ふるさと和歌山PRプロジェクト」を計画しました。和歌山県の産業を中心にこだわりをもった方と出会わせ、学んだことをPRして発信していくことで、子どもが社会に対する見方・考え方を確かにし、意欲的に追究することができるのではないかと考えました。和歌山の産業を入口として日本の産業に広げ、再び、ふるさと和歌山（地域）を見つめ直すという学びによって、地域を愛し誇りをもつ個に育てることができるのではないかと考えています。そして、単元の終末には学んだことを校外で和歌山市の住民に発信をする活動を予定しています。そうすることで、産業を視点に一人一人が地域の代表として調べ、自分たちの生活を見つめ直すきっかけをつくりたいと考えます。

## ◎単元の終末に（作文より抜粋）

4月から学習の中で社会的事象について他人事としてとらえがちだったAさんの作文を紹介します。

今年の社会科はちょっと違った。資料の読み取りが大事ってことがわかった。そして見学やインタビューも面白いけど、和歌山を元気にする仕事をしているすごい人と会うことができ、いろいろな仕事を一生懸命している人は決して自分のことを考えているのではなく、和歌山や日本の産業や漁業のことを考えているんだってことがわかりました。だから自分たちでも水産業を応援して、ずっとマグロの食べられる国にしていきたいです。そのために消費者としてだけでなく発信して多くの人に伝えることをがんばります。(Aさん)

作文にあるように、子どもたちの水産業に対する思いは強く、単元が終わった今も学習を継続していると感じる場面が多くあります。今後も、社会科の学習で学んだことを生かして、地道に、地域学習を広げ、続け、深めていくことが地域DNAとなると考えています。

11月の研究発表会では、同じ様に和歌山の産業「工業」また「流通」をテーマに、5年生ならではの熱意あふれる話し合いができることを確信しています！ぜひ、ご覧ください。

「体づくり運動 多様な動きをつくる運動遊び」  
～どうぶつ小学校へ行こう！～

体育科  
2年C組担任  
渡辺 圭



## 1. 「どうぶつ小学校へ行こう！」について

1年間を通して「どうぶつに学ぶ，どうぶつで学ぶ」をテーマに取り組んでいます。本単元では，子どもが興味をもって活動できるように，どうぶつ先生と活動の場を設定し，その先生の出す課題に取り組んでいくようにしました。各場の詳細は以下のとおりです。

	うさぎ先生のジャンピング教室 課題「いろいろなジャンプをしよう」	さる先生の一本橋教室 課題「落ちずに一本橋を渡ろう」	いるか先生のフラフープ教室 課題「道具の動きに合わせて動こう」
活動の詳細	<ul style="list-style-type: none"> <li>置き方を服うしたダンボールを跳び越える</li> <li>高い所から，遠くへジャンプする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>障害物(コーン)をよけて渡る</li> <li>フラフープをして渡る</li> <li>いろいろな姿勢で渡る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>フラフープをしながら歩く</li> <li>転がっているフラフープを跳び越えたり，くぐりぬけたりする</li> <li>大なわを跳ぶ</li> </ul>
活動の写真			

子どもたちには，各先生の出す課題を，よりおもしろく取り組めるように「動き」「道具」「人数」を工夫させました。考えた工夫は授業の最後に，色別のカードへ記入し発表し，交流しました。このカードは，子どもたちが動き，器具，人数どこに意識が向いているのかをみとるためのもので，そのみとりを活かして，声かけや，道具の追加，場の変更など支援をしていきました。

## 2. 授業の実際（第1時～第3時）

30人を10人ずつ3グループに分け，前学年の3クラスが交ざるようにグルーピングしました。

	うさぎ先生のジャンピング教室	さる先生の一本橋教室	いるか先生のフラフープ教室
見られた工夫	道具の工夫…ダンボールの置き方を工夫。 動きの工夫…まわりながら，手足を広げて，横向きで 人数の工夫…2人で手をつないでとぶ	道具の工夫…コーンの置き方を工夫。 動きの工夫…フラフープお手玉をしながら 人数の工夫…出会ったらジャンケンをする	道具の工夫…フラフープの本数を増やして回しながら歩く。 動きの工夫…転がっているフラフープを連続してくぐる。 人数の工夫…3人連続して跳び越える。

第1時～2時は道具の工夫が最も多く，第3時になると動きの工夫が多くなりました。子どもの意識が「動き」へ向いていた様子が活動からも見てとれました。

## 3. 校内研究授業から見えた課題（第4時）

### ①工夫のカードについて

掲示の仕方が課題です。日にちごとに分けて掲示しました，見やすいとはいえませんでした。子どもが共有できるように…というねらいが実現できる掲示の仕方を再考したいと思います。

### ②場について

平均台を置いた場では，ジャンケンというゲームに意識が行き，動きを広げるということにつながりませんでした。そこで第5時に傾斜や小さい箱を置いて場を提示したところ，そこでのバランスを楽しみながら，平均台を渡る姿が見られました。「場づくりの経験」を積み重ねていくことが今後の課題であると感じています。

## 4. 最後に

2年C組には体育に苦手意識を持つA君がいます。そんなA君がこだわってしていたのが，フラフープを回しながらで移動することでした。校内研究授業当日も，黙々とその技に取り組んでいました。活動中でも教師のところへ来て，自分の上達ぶりを報告しにきていました。

そこで最後の工夫の紹介でA君を指名しました。みんなの前でフラフープを回し，たくさんの応援を受け，体育館の端から端まで落とさずにやり切ることができたA君は満足感でいっぱいの表情をしていました。A君の例のように「体づくり運動」は，子どもたちが運動における自己肯定感をもちやすい単元だと思います。「体育大好き！」と言える子どもを育てるために，今後とも研究を進めていきます。

## 1年生教室にも新聞を！ ～新聞で数字を見つけよう・しりとりをしよう～

国語科  
1年A組担任  
湯浅 明菜



「今日の新聞、まだ届いてないの。ぼく、読みたいんだけど。」  
毎朝、こうしてせがまれて、私の一日が始まります。

1年生が、新聞記事を読んで、内容を理解するのは難しいことです。しかし、1年生でも新聞に親しみをもつことは十分にできるはず。まずは新聞を身近なものにしようと考え、本学級では小学生新聞を毎日配達してもらっています。

教室に新聞が届くようになると、朝の読書タイムや帰りの用意が早く終わって待っているときなど、スキ間時間を見つけては、競うようにして新聞を手取る子どもたちがいます。

しかし、新聞が届くようになってから約3週間後、一度でも新聞を見たと言う子は19人。まだ、3分の1は、新聞に興味をもっていませんでした。

そこで、朝日小学生新聞（平成26年5月30日付）を使用して、授業をおこない、全員が新聞に触れることのできる初めての機会を設けることにしました。

まず、教室に届いている新聞を取り出し、気づいたことを挙げました。その中で、子どもたちが心をつかまれたのは、①ほぼ全ての漢字にふりがながふられていること、②カラーの多さ、③漫画やイラスト、写真でした。

その次に、1面のトップ記事を教材として使用しました。6月1週目の実践です。既習の文字は、ひらがな全てと1から10までの数字でした。そこで、「数字を見つけよう」「ひらがなを見つけて、ペア（隣の席）でしりとりをしよう」という2つの活動を行いました。

**数字を見つけよう** 見つけた数字に色を塗りました。それほど多くないので、全てを見つけ出そうと必死です。記事以外にも、新聞の上に日付を発見したり、号数の大きさに驚いたりしていました。

**ひらがなを見つけて、ペアでしりとりをしよう。** しりとりをすることで、ペアで活動する必然性がうまれます。さらに、二人で協力すれば見つけやすくなります。何の言葉にするか話したり、「“あ”を見つけたよ」と教え合ったりして、楽しく取り組んでいました。

**最後に、一人一人に小学生新聞一日分を配る** これまで教室の新聞を読んだことのなかった子ども大喜びして新聞を開いていました。

絵本を読んでも絵だけを眺めたり、言葉を一つずつゆっくり読んだりしている子どもも多い中、今回の実践では、新聞の細かい文字を見ることを楽しむ姿が見られました。

もちろん、一度きりの実践では、子どもたちが自ら新聞を手にとって慣れ親しんでいく姿につながるとは言えません。文字への関心が高い1年生ですので、今後も、カタカナや漢字、写真などを使った実践をと予定しています。新聞を使った学習活動を継続し、子どもたちにとって新聞が身近なものであるようにしていきます。



### 学習後の感想より

- ・きょうは しんぶんをつかって たのしかったよ。
- ・きょうは はじめて こどもしんぶんが みられました。たのしかったです。
- ・すうじがいっぱいあって すごかったよ。
- ・ペアで しりとりを して たのしかったよ！
- ・しんぶんしを もらって、しりとりや、すうじを みつけるので たのしかったよ。
- ・この しんぶんしで しりとりや、すうじが さがせるなんて！



## きゅうしょくしつのひみつ

～1年「だいすき ぼくらのふぞくしょうがっこう」～

生活科  
1年B組 担任  
中西 正子



### ★「きゅうしょくしつ」への興味

学校たんけんで家庭科室に入ったときのことで。

「ここ、給食を作っているところかな」「火が出るところ（コンロ）あるもんね」「だけど作る人がいないのはおかしいなあ」「作るお勉強の場所じゃないかな」こんな声が聞こえてきました。

また、給食室に隣接するプレイランドで遊んでいたときは「なんかいいにおいがしてきたよ」「おでんかな」と想像をふくらませる姿がありました。毎日の献立をチェックして給食時間を楽しみにしている子どもたちにとって、給食室のひみつを探ることは魅力的な活動になるにちがいないと思い、単元を組みました。

### ★子どものハテナ

栄養教諭による食育の授業で、給食の調理道具をさわらせてもらった子どもたち。家と比べて、その大きさに感嘆の声があがりました。そして、約610人分もの給食をたった6人の調理員さんで作ってくれていると知り、「どうやって作っているんだろう?」「朝、何時から作っているんだろう?」とハテナは広がっていきました。



### ★きゅうしょくしつたんけん

ハテナ解決のために、作っているところを見てみたいと願う子どもたち。でも



今や衛生管理上、調理しているところを見学できる時代ではなくなりました。そこで、教材としてビデオ撮影をさせてもらうことにしました。検体を提出し、服装を整えることによって入室許可がおります。

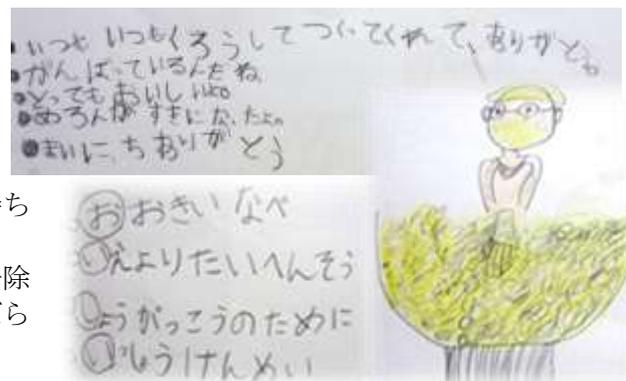
そのビデオを見ながら、気付いたことを出し合うことにしました。三色どんぶりの卵を割ったり、溶いたり、炒ったりする様子を見た子どもたちは、自然に調理員さんと同じ動きを始めました。そしてビデオを見ている最中、たくさんのつぶやきが飛び交いました。ところが、話し合いになると気付いたことを出し合って深めるのが難しかったです。

そこで再び、ビデオを少しずつ切りながら、「おうちと比べてどうか」という視点ももたせ、動作を入れながら進めていきました。「腕がすごく疲れるね」「腰も痛そう」「おうちより大変そうだよ」「400個の卵を割るとき2人なのにすごく早いよ」「小さい入れ物に割って、一つ一つ見てくれているんだね」「おうちでクッキーを作ったときも、卵が悪くないかお母さんが調べていたよ。でも400個見るのは大変だよ」「汗が出てくるだろうな」「その汗が給食に入らないように白い帽子をかぶってるんじゃないかな」「きっと『おいしくなあれ』って思って、まぜまぜしてくれているよ」「休憩時間はあるのかな?」など、思いやハテナをふくらませることができました。

### ★見つけたよ 「おいしい」のひみつ

給食室にワゴンを返しに行くとき、これまで以上にキョロキョロと観察するようになった子どもたち。「ありがとう」の気持ちも深まったようです。

教室に調理員さんを招いておたずねをしたり、夏休み前に大掃除をしている給食室の様子を見学させてもらったりして、もうしばらく給食室のひみつを探す予定です。



#### From Editors

『らいぶ・創りえいた一』も14年目を迎えました。「生き生きと本物を創り出すひと」という意味を込めています。本校ホームページにはカラー版を掲載しています。ご意見・ご感想をお寄せ下されば幸いです。  
編集委員：矢出、中西、川村、居澤、宮脇、田中

#### 和歌山大学教育学部附属小学校

〒640-8137 和歌山市吹上1丁目4番1号  
TEL (073) 422-6105  
FAX (073) 436-6470  
URL <http://www.aes.wakayama-u.ac.jp>  
E-mail [fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp](mailto:fuzoku@center.wakayama-u.ac.jp)